

## ■ 書評 ■

マイケル・W・アップル, 長尾彰夫, 池田寛 編

『学校文化への挑戦——批判的教育研究の最前線』

筑波大学 田中統治

本書の意図は帯にうたう「不平等再生産論を超えて」 という点にあるだろう。それは、前著『学校文化——深層へのパースペクティブ』（東信堂、1990年）の続編にあたる本書に一貫したテーマである。前著を踏襲しながら本書が提示する展望を要約すれば、いま、わが国の教育研究にとって、「教育における政治性を批判的に対象化し分析する」（P. 228）ことの重要性である。この論点は70年代後半から台頭してきたネオ・マルクス主義の研究視角と一致するものである。実際、その代表的論客であるアップル、M. W. が編者の1人に加わり、彼が序章「批判的教育研究の構想」を執筆し、また掲載論文の選択にも助言を与えている。

本書には、計6編の英書文献の紹介が収められ、これに加えてわが国の教育現実に関する考察が個々に付されている。これらの文献はいずれもアップル編による『批判的社会思想』シリーズとして刊行された著作である。そのテーマは階級から、人種、ジェンダー、識字、教科書、および学校の官僚制構造に至るまで多岐にわたっているが、それぞれが先述の批判的視角を織り込んでいるから刺激的な切り口を示してくれる。大部な各文献の論旨をここまで煮つめて整理された著者たちの意気込みをまず讃えたい。

ここで、本書がわが国の教育社会学研究に果たす役割と意義を中心に論評を試みたい。

その第1は、従来の機能論による学校文化研究へのインパクトである。不平等の再生産という研究視角がこの分野においてそれほど斬新というわけではない。しかし、本書が紹介する接近法には日本の教育社会学が学ぶべきところがある。たとえば、各論稿のなかでとくに興味深く読んだ「ロマンスを通して女になる」（クリスチャン＝スミス、L.）は、10代少女向けの恋愛小説を対象に、ロマンス、セクシュアリティ、およびビューティフィケーションの3つのコードを抽出してみせる。生徒による物語の読み方に焦点化した解釈的なレンズが、性別下位文化に潜むジェンダー・コードとその意味世界を生き生きと描きだすのである。この解釈的方法が、社会的差異化のメカニズムの解明には不可欠であって、従来、学校の内部過程をとかく脱文脈化しがちであったわが国の学校文化研究にとって学ぶべき点である。ただし、本書が学校文化の解釈的研究を推進するために十分な方法的視角を呈示しているかといえ、いくつかの留保を付さねばならない。

それを読後感によって表現するなら、

本書の研究視角のもつ「窮屈さ」という点にある。批判理論の効用は、教育研究者と実践者に自己反省を迫ることによって、社会改造運動への啓蒙を図るところにあるのだろうが、しかし、その論点といまの学校が直面している問題との断絶はあまりに大きい。たとえば、都市部公立の学校文化が「平等」主義にとらわれている一方で、教育の差異化を求めるポストモダンの趨勢に立ち遅れてしまうというパラドックスは、どう説明されるだろうか。あるいは、日本のフリー・スクール運動の多くがしばしば「内紛」に陥ってしまう学校文化面での原因をどこに求めたらよいか。こうした疑問がとくに日本の現実分析の項を読むときに生じてくる理由は、「輸入超過」と批判されるわが国社会科学の体質からなのか、それとも、機能主義による「現状肯定」の説明に毒された評者の狭隘な視野によるのであろうか。

第2は、批判的教育研究が教育社会学に及ぼすインパクトである。本書に掲載された論稿の多くが、具体的素材をその内側から理解することによって、理論の実証性と解釈の妥当性を高めようと努めている姿勢は、先述の通り評価されてよい。しかし、「学校論とは、学校をめぐる権力関係の分析だといって過言でない」

(p. 62), 「教育と権力がいかに作用するかについて理解を深めることが、批判的教育研究の構想がめざすべき新しい方向である」(p. 25, 評者による要約)とすれば、本書のもつ価値前提とイデオロギーを問い返すことが必要である。

教育社会学の立場から考えると、解釈的研究は、差異という事実とその意味を根本的に区別しなければならない。差異は、人々が学校のなかでそれを特定のやり方で重要視するときに意味をもつからである。批判的教育研究がもっぱら権力関係の側面からのみ、このような意味の構成過程に切り込むのであれば、それは一定の限界に直面する。なぜなら、学校内部で生ずる「多元的現実」は、個々の学校のもつ組織構造と成員間の相互作用によって構成されるからであって、我々がこれに分け入るにあたって、権力関係の批判的分析や社会的矛盾の暴露という手法しか持ち合わせなければ、文化の解釈学でいう「厚い記述」にまで到達しがたいからである。

このように、批判的教育研究と教育社会学の間には埋めるべき溝が横たわっているけれども、本書の刊行がその架橋的役割を果たすことを望みたい。

◆四六判 280頁, 2800円  
東信堂